

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K02538

研究課題名（和文）フランス文学における温泉保養地の表象の変遷

研究課題名（英文）The Transformation of Representations of Spa Resorts in French Literature

研究代表者

大橋 絵理（OHASHI, Eri）

長崎大学・言語教育研究センター・教授

研究者番号：70213824

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000 円

研究成果の概要（和文）：研究成果としては、おもに書籍、研究論文、国際学会での発表、講演会、研究会があげられる。まず書籍としては、日本で1冊、ドイツで1冊という2冊の共著の中で温泉保養地と文学について論じた。また、研究論文としては4本執筆し、神話と入浴、温泉と医療、温泉保養地と女性、経済、映画における温泉保養地等について分析した。

国際学会では、「国際比較文学会 ICLA」や「近代語学文学国際学会 FILLM」 「近代イギリス文学における温泉保養地」で、ウィーン大学、マカオ大学、ジョージア大学、クレール・モンフェラン大学で、イギリスやフランス、日本文学及び映画における温泉保養地の表象について発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、18世紀から19世紀に飛躍的に発展した温泉保養地という特殊な空間が、経済、医学、女性の自立という近代性と密接に結びついており、作家達の創作意欲を刺激する要因の一つであったことを解明した。さらにAIの進化によって世界の未来が不透明な今日、本研究は古代から現代に続く創作とは何か、及び創作作品の意義を探る手立てとしても独自の貢献をなしたと確信する。

また、社会的意義としては、ヨーロッパと日本という非常に異なる歴史や宗教観をもつ国々が、文学や映画という想像世界で温泉保養地にどのような象徴を持たせたかを解明したことで、多様性の深い理解につながったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The main research outputs include books, research papers, presentations at international conferences and lectures. First, in terms of books, I discussed spas and literature in two co-authored books published in Japan and Germany. Additionally, I wrote four research papers, analyzing topics such as mythology and bathing, hot springs and medicine, women and spas, and spas in films. At international conferences, I presented on the representation of spas in French, British and Japanese literature and films at the University of Vienna, the University of Macau, the Clermont Auvergne University and the University of Georgia.

Ultimately this research reveals that the unique characteristics of spas, where physical and mental healings intertwine with mythology, religion, love, money, betrayal, despair and death, inspire continuously not only numerous writers but also filmmakers.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学 温泉保養地 映画 イギリス文学 モーパッサン

1．研究開始当初の背景

（１）温泉保養地の国際的な学術的研究としては、まずウラディミール・クチュリフの『世界温泉文化史』があげられる。クチュリフは、古代から中世の入浴制度の変遷、温泉治療法の歴史、18世紀から19世紀にかけての湯治医の仕事等の保養地の生活、ロシアやフィンランドのサウナ、トルコやアラビアのハマームを比較・調査した。また、アルヴ＝リトル・クルーティエは、『水と温泉の文化史』で文化としての入浴に注目し、水に関わる神話及びその儀式から、温泉への信仰や治療がどのように誕生したかを分析した。他にもアラン・コルバンは『レジャーの誕生』の第3章の「教養としての余暇から有閑階級の余暇へ」の一部で、エヴィアンやヴィシーが温泉保養地として本格的に建設されたのは19世紀で、治療だけでなくブルジョアジーの社交の場としての役割を果たすようになったと指摘している。以上のような先行研究を検討した結果、報告者は、その役割が大きく変化しながらも古代から現代にかけてなお人々を魅了する空間であり続ける温泉保養地の特異性に着目した。

（２）報告者は、フランス、ルーアン大学にD.E.A.論文として『『感情教育』における政治と恋愛感情の関係性』を提出し、またフローベールの作品における登場人物の創造の過程を中心に分析を行った。その後フランス、レンヌ大学でマーフィ教授の指導下『『三つの物語』の草稿研究：フローベールにおける人物、空間、「もの」の超越性』というテーマで博士号を取得した。以上の過程で多数の文献や資料を収集し、フランス文学全般、特に19世紀のフランス文学環境に関する実証的知見を深めてきた。それにより、古代には神話的空間であった温泉地が、19世紀のフランスで飛躍的に発展し、人口樂園のような形態に変化し、作家達の創造力を育くんだ点に興味を覚えた。そこでフランス文学をさらに幅広く新たな視点で分析したいと考え、文学と温泉リゾートの関係を研究するに至った。

2．研究の目的

（１）19世紀の文学に現れる温泉リゾートを舞台とした作品や場面を、「神話」「医学」「社交」「経済」という4つの視点から分析し、温泉保養地という「人口樂園」がフランス文学に与えた影響を考察する。

（２）フランスだけでなくヨーロッパの他の国々の文学作品での温泉保養地の象徴の相違を分析する。さらに日本文学における温泉地の表象も分析し、西洋と日本の創作意識の違いを宗教的、歴史的視点から比較・検討する。

（３）20世紀になると文学だけでなく映像の分野においても温泉保養地は重要な役割を果たすようになる。そのことから映画の中の温泉リゾートに注目し、その現代的な意義を探求する。

3．研究の方法

（１）温泉保養地の「神話」「医学」「社交」「経済」に関する記述のデータベースを作成し、必要に応じてフランス国立図書館電子テキストサイト Gallica から初版本、雑誌、新聞、ガイドブックの電子テキストをダウンロードした。また、19世紀のポスターや漫画も可能な限り収集し、電子テキストがない場合は、フランス国立図書館で原点調査を行った。さらに、関連する温泉地を訪問し資料を収集し、絵画の場合は美術館を訪問し原画を調査した。

(2) 温泉と神話の関係を分析するために Gallica では参照できない、L. ボナール『ガリアの温泉：ガロロマン時代の温泉と鉱水』、R. ジヌヴェス『古代ギリシャの入浴』等を読解した。加えて、ケンブリッジスコラプレスから出版された『19 世紀におけるイギリスとフランスのスパ』、フォルチュナド・ダヴィエ＝ヌアルの『作家と温泉療養：1800 年～1914 年』等の研究書も読解した。

(3) 文学作品においては、フランスのマルグリット・ナヴァール、モンテーニュ、セヴィニエ夫人、ドーデ、テーヌ、モーパッサン、ルベルタン、ゴンクール兄弟等の作品や日記、ヨーロッパの他国においてはジュエーン・オースティン、ジャン・パウル、レールモントフ等イギリス、ドイツ、ロシア等の温泉保養地を舞台とした小説を分析した。

(4) 日本には西洋とは異なった作家と温泉保養地との密接な関係があることから、温泉を詠んだ松尾芭蕉の俳句、川柳、温泉地を描いた志賀直哉、川端康成、夏目漱石等の小説も考察し、他の国々の文学と比較・検討した。

(5) 映像の分野では、温泉保養地を舞台としたフェリーニ、タルコフスキー、アラン・レネ、宮崎駿等の映画や文学作品を映画化した作品を比較・分析した。

(6) フランスを訪れボルドー大学やパリ大学等の文学研究者との情報交換や研究打ち合わせ、及び文献調査、収集を行った。また、19 世紀の温泉施設が残っているフランスのヴィシー、ドイツのバーデン・バーデンやイタリアの古代ローマのカラカラ浴場跡等を訪問し、現地でしか購入できない書物を入手した。さらにオーストリアにおける温泉保養地レーマテルメバーデンやザルツカンマーグート テルメでの資料収集を行った。

4. 研究成果

(1) 平成 28 年度は、「入浴と神話—古代ギリシャ文学を中心に—」という論文を『長崎大学言語研究センター論集』に発表した。本論文では、ホメロスの『オデュッセイア』、ソポクレスの『アンティゴネ』、エウリーピデースの『タウリケーのイーピゲネイア』、ヘロドトスの『歴史』等の身体と水の関係、及び入浴と神秘性について分析した。また、ウィーン大学で開催された「国際比較文学会」で「旅行、植民地、移民による言語意識の変貌」(フランス語)について発表し、19 世紀から 20 世紀にかけての歴史に伴う言語意識の変容によって、いかに現代の多言語主義が形成されたかを論じた。さらに長崎大学で研究会「フランス文学研究会：文学における温泉の表象」を主宰した。そこで、特に古代ギリシャ時代の神々が水及び入浴といかに密接な関係を持っていたかを「ヨーロッパにおける神話と温泉・入浴」というタイトルで発表した。

(2) 平成 29 年度は、「文学における温泉と医療：フランスを中心に」という研究論文を『長崎大学言語研究センター論集』に執筆した。古代ギリシャ・ローマ時代には『ヒポクラテス全集』にみられるように温泉は医療の一環として利用されていたが、中世に入るとペストの脅威によって否定され、当時の高名な医師達は温泉の閉鎖を主張した。だが、ペストの終焉と同時に温泉療養は再度流行となり、医療技術が進んだ 19 世紀になっても、肺病、胃病、梅毒等の病氣治療のため多くの人々が温泉地を訪れた。温泉保養の身体的効果による精神的変化をゴンクール兄弟やドーデの作品を通して分析した。

また大分の別府で開催されたシンポジウム「大分文学考Ⅰ～別府編」で「小説と映画における温泉：日本とヨーロッパ」についての講演を行った。志賀直哉の『城崎にて』やチャーホフの『犬を連れた奥さん』を、映像を交えながら日本とヨーロッパの温泉神話について論じた。

(3) 平成 30 年度は、「温泉保養地と社交：フランスを中心に」という論文を『長崎大学言語研究センター論集』に執筆した。19 世紀の初頭に書かれたラマルチーヌの代表作「湖」は、人里離

れた山奥の温泉保養地を舞台とする人妻との悲恋の詩であった。だが 19 世紀半ばになると温泉保養地の抒情的であったイメージは薄れ、テヌが『ピレネー紀行』でブルジョワ、貴族、学者を類型化し、保養地での俗性を暴いたように、通俗的な空間へと変貌した。その後、オクターヴ・ミラボーが『神経衰弱者の 21 日』に描いたように、保養地は本来温泉の効果を必要としていた療養者達を不吉なものとして隠蔽する矛盾した空間となり、その結果衰退していったと結論づけた。

(4) 令和元年度は、ヨーロッパの温泉保養地も国によってその象徴性が異なることに気づいたことから、マカオ大学での「国際比較文学会」で「フランス文学とイギリス文学における温泉保養地の相違」(フランス語)というテーマで発表した。イギリスでは温泉保養地の流行は 18 世紀が頂点だった。主にジェーン・オースティンの『ノーサンガ・アベイ』や『説得』の舞台のバースに見られるように、女性主人公が理想的な将来の夫と出会う社交的でロマンチックな場所として機能していたが、その後流行は海岸へと移行し温泉保養地は廃れていった。他方、フランスでは、フランス革命の混乱のためその頂点は 19 世紀になった。産業革命の影響で温泉はモーパッサンの『モントリオル』に見られるように、新たなリゾート開発地として、投資家や建設、不動産業者が利益追求のために競い合う経済的な空間として認識されたという相違があることを指摘した。

さらに、ヨーロッパだけでなく作家と温泉保養地が密接な関係を持っている日本の資料を収集し、宗教の観点からイギリスと日本の文学における温泉保養地の表象の相違についての研究を進めた。その成果を、フランスのクレール・モンフェラン大学での国際学会で「イギリスと日本の温泉保養地」(フランス語)として発表した。イギリスでは、数世紀にわたって温泉保養地はキリスト教の禁欲主義的な理由で拒絶され、本来持っていた神秘性を失うことによって、その後単なる社交場となり流行の推移とともに文学の分野から消えて行った。他方日本では、世俗の穢れを落とすためという信仰生活の一環として寺が無料で人々を入浴させていた「施浴」に象徴されるように、温泉と宗教との結びつきは途切れなかった。その結果、小説だけでなく川柳や俳句として市井の人々の創作の中でも頻繁に扱われ、それが現代まで続いていると指摘した。

(5) 令和2年度は、文学だけでなく映画の分野におけるフランス、イタリア、チェコ、ロシアの温泉保養地についての文献の調査、研究のため研究書や DVD を購入し、「映画における温泉保養地の表象」についての研究論文を『長崎大学言語研究センター論集』に執筆した。その中でイタリアのフェデリコ・フェリーニの『8 1/2』、フランスのアラン・レネの『去年マレンバートで』及びロシアのアンドレイ・タルコフスキーの『ノスタルジア』を比較した。各映画は、温泉保養地を回想、不在、聖なる空間という異なったテーマで取り扱っているが、ひとつの共通点が認められる。それは、記憶や幻想という非現実的なものが、実利世界である現実を凌駕するわけでも否定するわけでもなく、矛盾を抱えたまま現実と共生することが可能な空間を映像化するのに適する場所として温泉保養地が選択されたということであると指摘した。

また、令和2年度でこの科学研究費は終了となる予定であったが、コロナのために研究の継続が困難になり、延長を申請しそれが了承された。

(6) 令和3年度は、ウィーン大学で開催された「近代言語文学国際学会」で「映画における温泉保養地」(フランス語)について発表した。内容としては、令和2年度の論文とは異なり、ヨーロッパと日本の小説が映画化された作品を中心に比較・考察し、温泉保養地の新たな側面の分析となった。バルザックの『あら皮』の映画化では、主人公のラファエルは、体調を崩し、その回復のために温泉保養地を訪れる。そこは山奥の牧歌的な村であるにもかかわらず、都会の貴族階級やブルジョワ達が集う人間の欺瞞が露わになった「ミニパリ」であった。ラファエルはそこ

で人々から異分子として疎まれ、決闘によって命を狙われるという悲劇的な状態に陥るというように温泉地の残酷さが描かれる。川端康成の『伊豆の踊子』の映画では、温泉街は、身分制度の上方に位置する大学生である主人公と 20 世紀初頭までは、身分的に最下位に属していた旅芸人の交流が可能となった空間として描かれる。しかし、それは一時的なことであり、最終的にはふたつの階級は分裂して終わる。小説の映画化の困難な点は、小説は文字によって長さに制限はなく感情や状況を詳細に表現できるが、映画は短い時間で完結しなくてはならず、会話以外は単発的な映像の連続によって様々な感情等を観客に提示しなくてはならない。温泉保養地はその非日常的で印象深いイメージを観客抱かせ、フランスや日本でも文学的な複雑な想像の世界や社会問題を映像で提示するのに適した空間であると論じた。この発表をもとに執筆した論文は、2026 年に Adams Bodomo and Carola Koblitiz 社から出版される共著に収録となる予定である。

また、平成 28 年度にウイーン大学での発表をもとに執筆した「旅行、植民地、移民による言語意識の変貌」(フランス語)が共著の書籍『国家とアイデンティティの言説』に集録された。

(7) 令和 4 年度は、ジョージア大学での国際比較文学会で「フランスと日本における温泉：歴史と文学」(フランス語)について発表した。モーパッサンの『モントリオル』では男性たちは温泉保養地で金銭目的のために人々を欺き、裕福な女性たちと結婚しようと画策する。しかし、反対に男性に依存していた人妻のクリスティーヌは、保養地で初めて自発的な恋愛を経験する。その後妊娠したことで恋人から裏切られ絶望に陥るが、最後は相手を突き放し子供を育てる決心し、自立した女性へと変貌する。他方日本においては夏目漱石の『ぼっちゃん』を取り上げた。主人公は進歩的な東京から、封建時代を象徴するような田舎の温泉地に教師として赴任する。その地で最後まで権力に従わない彼の態度は、新しい時代の始まりを示していると考えられる。温泉地が、古代から現在まで継続してきた理由のひとつはその多面性にあるが、フランスと日本でも過去の因習から決別し、未来に開かれた場ともなることを指摘した。この発表をもとに論文を執筆し、査読の結果、共著としてオンラインで出版されるという通知を受け取った。また、愛媛大学で「温泉保養地をめぐる日本とヨーロッパの文学と映画」についての講演を行った。

(8) 平成 5 年度は、ソルボンヌ・ヌーヴェル大学から「ピエール・ロチ：旅人、作家」の国際学会に招待され、「ピエール・ロチ：長崎の寺から寺へ」(フランス語)というタイトルで発表した。この発表では、長崎を舞台とした『お菊さん』と『お梅の三度目の春』を中心に、中国寺である「滝の観音」で感じる望郷の念、廃仏棄損で神社となった「八坂神社」での祭での日本人の宗教観、墓地で出会った寺の娘との交流を通して、ロチの日本への意識が明治時代という歴史の転換期と呼応していかに変化したかを考察した。この発表をもとに研究論文を執筆し、それが共著に収録される予定である。

最終的に、本研究を通して、身体的、精神的な癒しだけでなく、神話、宗教、愛、金銭、裏切り、絶望、死が混然一体となり凝縮された温泉保養地の特殊性こそが、多くの作家達のみならず、映画監督たちにもインスピレーションを与え続けたことが判明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 大橋絵理	4. 巻 9
2. 論文標題 映画における温泉保養地の表象	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 長崎大学言語教育研究センター論集	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大橋 絵理	4. 巻 7
2. 論文標題 温泉保養地と社交 : フランスを中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 長崎大学言語教育研究センター論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大橋 絵理	4. 巻 6号
2. 論文標題 文学における温泉と医療 - フランスを中心に -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 長崎大学言語教育研究センター論集	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大橋 絵理	4. 巻 5号
2. 論文標題 入浴と神話 - 古代ギリシャ文学を中心に -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 長崎大学言語教育研究センター論集	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Eri OHASHI
2. 発表標題 Pierre Loti : du temple au temple a Nagasaki
3. 学会等名 Academie Francaise, Sorbonne Nouvelle University and Societe de Geographie (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大橋 絵理
2. 発表標題 温泉保養地をめぐる日本とヨーロッパの 文学・映画
3. 学会等名 愛媛大学人文学会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Eri OHASHI
2. 発表標題 Le Thermalisme en France et au Japon: traditions historiques et representation litteraires
3. 学会等名 International Comparative Literature Association (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Eri OHASHI
2. 発表標題 Les stations thermales dans le cinema
3. 学会等名 The International Federation for Modern Languages and Literatures (国際学会)
4. 発表年 2021年

1．発表者名 Eri OHASHI
2．発表標題 Les differences dans la representation du thermalisme dans la litterature francaise et anglaise
3．学会等名 International Comparative Literature Association (国際学会)
4．発表年 2019年

1．発表者名 Eri OHASHI
2．発表標題 Le thermalisme en Angleterre et au Japon: traditions historiques et representations litteraires
3．学会等名 Baths and Spa Waters in the culture and Literature of Early Modern England (国際学会)
4．発表年 2019年

1．発表者名 大橋 絵理
2．発表標題 小説と映画における温泉：日本とヨーロッパ
3．学会等名 大分文学考 Ⅰ - 別府編 - (招待講演)
4．発表年 2017年

1．発表者名 Eri OHASHI
2．発表標題 L ' evolution des consciences grace a la langue : au prisme du voyage, de la colonisation, et de l ' emigration
3．学会等名 International Comparative Literature Association (国際学会)
4．発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Daniel SYROVY, Joelle PRUGNAUD, Clara BLUMEI, Eri OHASHI, Ana Maria DELGADO, Chayma DELLAGI, Cristina Andrea FEATHERSTON	4. 発行年 2021年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 603
3. 書名 Discourses on Nations and Identities	

1．著者名 小笠原 真司、廣江 顕、松元 浩一、谷川 晋一、稲田 俊一郎、徐 佩伶、水本 豪、團迫 雅彦、隈上 麻衣、古村 由美子、丸山 真純、大橋 絵理、大谷 英理果、奥田 阿子	4．発行年 2018年
2．出版社 英宝社	5．総ページ数 181
3．書名 外国語の非 - 常識 - ことばの真実と謎を追い求めて -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

令和元年度に、明治・大正時代の日本人作家たちの小説を分析し、フランスで出版される予定の共著『Mediation, patrimonialisation et identite culturelle ; ecole en France et au Japon (日・仏の学校における，媒介，遺産化，文化的アイデンティティ)』（フランス語）に掲載される「日本におけるフローベールの受容」（フランス語）を執筆し、今後出版される予定である。

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------